
受験戦争

西内京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験戦争

【Zコード】

Z8691Z

【作者名】

西内京介

【あらすじ】

都内屈指の新学校で、受験を控えた三年生が自殺した。警察は受験のプレッシャーによる自殺と断定し捜査は打ち切られようとしたが、疑問を抱いた刑事館林は、ちょうど教育実習で訪れていた瀬郷洋輔に捜査協力の依頼をする。自殺した生徒は、成績も学年トップで、このままでどの大学にも入学できるはずだった。それなのにこの時期での自殺は、正直解せないというのだった。進めていくうちに、捜査線上に浮かび上がってきた一人の容疑者。一人とも、成績同率一位を誇る実力者だった……。

次々と浮かび上がる、それぞれの思惑。果たして自殺か、
全てのピースがそろつた時、驚愕の真実が明らかになる。
他殺か。

序章（前書き）

どうも。かなりしばらくぶりの投稿になります。西内です。
この小説は、自分の中でもまあまあ納得のいく作品に仕上げること
ができた、と思います。三人称で長編を書き上げられたことで若
干テンションがあがっているからかもですが。
皆様に最後まで読んでいただければ、これほどの幸いはありませ
ん。

青年は口を閉じ、自分の生命を確かめるように、ゆっくりと息を吐いた。両手を広げ、風を全身で受け止めようとしている。
気持ちいい。

口には出さず胸中で呟いた後に、青年は再び口を開け眼前に広がる光景を、まるで無邪気な子供のような気持ちで見下ろしていた。この町は、なんて綺麗なのだろう。

青年は思ったことを口には出さず、胸の内で呟いた。口にしたところで、自分の気持ちを分かち合う人なんてこの場にはいないのだからという、諦めにも似た思いがあつたからだつた。

一瞬、強い風が吹きつけ青年は危うく落ちそうになつたが、なんとかフェンスの網を掴み、堪えた。

風なんかに殺されてたまるか、どうせ死ぬなら自分で

その決意は固かつた。揺らぐことなく、遺書を書き、屋上のフェンスを乗り越え、ようやくここまでやってこられたのだ。風のせいでも、生涯を終えることがあつてはならない。

しかし、後一步。後一步を踏み出すことが出来なかつた。もう少しなのに。

悔しさと、自分の情けなさに涙を堪えることができなかつた。まさか、後悔しているのか。

心の底から涙を流していける自分に気づき、自問した。残念ながら、答えを出すことは出来なかつた。もう十分じゃないか。

その時、学ランのポケットに入れてあつた携帯が震えた。誰から、着信が入つたのだ。

自殺する前に人と話すのは、あまり気が進まなかつた。人と話すことにより、死への躊躇いが生じてしまう可能性があつたからだつ

た。

どうすればいいか、そう迷っていると携帯が鳴り止んだ。
慌ててポケットに手を突っ込み、携帯を取り出した。画面を開いて、かけてきた人物を確認する。

それは、この学園で唯一の友達からの着信だつた。

数秒迷った挙句に、青年は自ら友達の携帯に掛け直した。

「もしもし……」

会話は数分続き、青年は携帯を切つて夕空を仰いだ。
あいつは何を考えているんだか。

口元に微笑を浮かべながら胸中でそう呟くと、フェンスに背中を預けて携帯をポケットにしまった。

本心から言うと、友達からの着信は嬉しかつた。けど、やはり複雑な心境であつた。

揺らぐ決意　ここまで来たのに、また引き下がることになつてしまふのか。

顔に、いよいよ突き刺さるような痛みを伴つ風が吹いた頃、後ろのほうでドアノブが回る音がして、反射的に青年は振り向いた。ドアは、まるでスローモーションのようにゆっくりと開いていく。

青年はそれをじれつたく思い、歯軋りをした。

早く来いよ。

やがて、ドアは完全に開かれた。

第一章

不意に、今まで聞いたことのないような、不快感極まりない音が耳に入ってきた。

瀬郷洋輔は読んでいた本を閉じて、ゆっくりと音のした方向へ顔を向けてた。

音が聞こえてきたのは、ここからそう離れていないな。

そう思い、席を立つて洋輔は図書室を出た。

洋輔は某有名大学に通う一年生で、教育学部に所属している。専攻は歴史。教育実習生として、洋輔は今日、都内でも屈指の進学校、宝徳学園へとやってきた。

今日は初めてということあって、教室の後ろで世界史の授業を見学しているだけだったが、早くも洋輔の心は折れかけていた。

生徒の出来が、想像以上によすぎるのだ。自分よりも、もしかしたら頭がいいかもしれない。そんな不安が、洋輔によぎった。高校生より頭が悪いと示しがつかない。そう危惧した洋輔は、閉館時間のギリギリまで、宝徳学園の図書室で勉強しようと考えたのだ。

その最中に、遠くから肉の漬れたような音がしたのだ。集中力は途切れ、同時に洋輔の好奇心を駆り立てた。

宝徳学園の敷地面積は広大なため、まだどこに何があるのか把握できておりらず、図書室を出てから洋輔は早速迷った。自分がどこを歩いてきたかさえ、記憶が曖昧だつた。

とりあえず、出てきたからにはあの音の正体を突き止めなければならぬ。そんな使命感にも似た思いを抱きつつ進んではいると、窓の向こうに人だかりが見えた。

「なんだ？」

目を凝らして、人だかりを見てみる。

宝徳学園には三つの校舎がある。一一年の教室が主の、第一校舎。三年の教室と、進路のための資料室が設けられている第二校舎。図書室や保健室、食堂などがあるのは第三校舎で、この三つの校舎は縦に三列で並んでおり、一階の渡り廊下によつて繋がれている。洋輔がいるのは、第三校舎の一階。人だかりがあるのは、第三校舎と第二校舎の間に位置する中庭である。

洋輔は足早に人だかりを目指した。

外へ出るための通用口を開き、今度は駆け足で人だかりのもとへ向かう。

数十人の生徒たちは、真ん中にあるものを取り囲むよつとして集まっていた。

「なんだよ……これ」

動搖する声が、ちらほらと聞こえてきた。中には、嗚咽も聞こえてくる。洋輔の好奇心は、それに比例するようになります高くなつていった。

洋輔は、生徒たちが取り囲んでいるものは何なのか覗こいつと背伸びをしてみるが、如何せん身長には恵まれていなく、しかも前に入る男子生徒の身長がかなり高いため、何を取り囲んで動搖しているのか見えなかつた。

「あ、先生」

一人の女生徒が洋輔の存在に気づき、振り返つて声をかけてきた。その女生徒のことはよく覚えていた。今日の昼休み、声をかけてきた女の子だ。

宝徳学園は先ほども説明した通り都内屈指の進学校で、生徒たちはお互いをライバル視しており暗い子が多いのだが、声をかけてきた女子は他の生徒たちとは正反対の明るい子で、食堂でメニューを見ていた洋輔に、気さくに声をかけてきたのだ。そのため、彼女のこととは洋輔の記憶に強く残つていた。

そんな彼女が、今泣いているのだ。目は充血しており、今も頬に涙が伝つている。どうして泣いているのか、洋輔には皆目見当がつか

なかつた。

心配になつた洋輔は、生徒たちを強引に搔き分けて取り囮んでいたものを見た。

それを見た瞬間、絶句した。

洋輔の目の前には、血の池が出来ていた。内臓やら脳が飛び出ている物体が、そこにはあつた。見る限り男子生徒のようだが、学ランがなければおそらく判別がつかなかつただろう。それほどに、凄惨な死体だつた。これはいつたいどういうことなのか。

状況をよく理解できず、洋輔は頭の中で瞬時に様々なことを思い浮かべた。

その中の一つに、投身自殺という四文字がよきり頭上を見上げた。唯一、第三校舎には屋上がある。そこから、この男子生徒は飛び降りたといふのか。

そう考へると、途端に眩暈が襲つてきて、膝をついた。洋輔に声をかけた女子は短い悲鳴を上げ、前にいる男子生徒は彼女の悲鳴に驚いてこちらを振り返つた。

「先生、大丈夫？」

女生徒は、手に握り締めていた紙を丸めてポケットにしまうと、心配そうな声を上げて洋輔に駆け寄つた。その声に若干の安心感を抱きつつも、やはり心の中にある不快感を払拭することは出来なかつた。

図書室で聞いた肉の潰れる音の正体は、この男子生徒が飛び降りて地面に衝突した時の音だつたのだ。

そう思つと背筋に悪寒が走り、吐き気がこみ上げてくる。洋輔が口に手を当てるが、女生徒はそれを察して背中に手を当て、さすり始めた。周りの生徒たちは、洋輔達に注目している。

「どうしてこんなことが……」

鼻息を荒くしながら、洋輔は心の底から振り絞るよつと叫つた。

「おい、どうしたお前たち」

不意に、遠くから野太い声が飛んできた。生徒たちは、声の主を

振り返る。

近づいてきたのは、生徒たちから恐れられている体育担当の教師、山田哲郎だった。

この高校に通う生徒たちは勉強ばかりを必死に取り組み、運動部は一応存在するが所属している生徒は少ない。

つまり皆、体育が嫌いなのだ。

しかし山田は、体育の見学を相当な理由がないと認めなくて、生徒たちは嫌々体育の授業を受けている状況だ。生徒たちが嫌うのも無理はない。

その「ゴリラみたいな顔と、身長百八センチという大柄な体格がまた、生徒たちに別の恐怖を」与えているといえる。

「何があつた、ええ？」

生徒たちは萎縮して、山田に何も話さうとはしない。

「あれ、瀬郷君。どうした？」

女生徒に背中をさすられている洋輔を見た山田は、一瞬にやついた表情を浮かべ、中腰になつて訊いて来た。

「いえ……あの……」

洋輔も、上手く説明することが出来ないので、代わりに男子生徒の自殺死体を指差した。怪訝そうな表情を浮かべつつも、山田は指さされたほうに顔を向けた。

男子生徒の自殺死体を見た瞬間に、みるみる山田の表情を青ざめていき、先ほどまでの威勢は感じられなくなつた。

「あ……あ……」

口をパクパクさせ、山田も男子生徒の死体を指差していた。その光景は滑稽だったが、残念ながら洋輔もそれと同じような状態で、笑える立場ではなかつた。

「と、とにかく、先生に知らせないと」

独り言のように呟くと、山田はどこかへ走つていった。職員室へと向かつたのだろう。

「先生、とにかく保健室へ行こう

女生徒に優しく声をかけられ、洋輔は情けない気持ちになりながらも、頷いた。今はとにかく休みたいのだ。

体を支えられながら、洋輔は保健室のある第三校舎へと戻った。

「先生つて、ついていないね」

保健室に入つてから、棚に並べてある薬品を眺めていた女生徒は、咳くようにいつた。

「何が？」

気持ち悪いせいもあつて、洋輔はぶつきらぼうに言った。

「だつて、教育実習に来たのにこんな事件に出くわすんだもん」

女生徒の言葉には答えず、洋輔はしばらく辺りを見渡して、手近にあつた椅子を引き寄せ座つた。

「確かにそうだな」

改めて女生徒の言葉を考えてみると、納得のいく部分があつた。

洋輔は、一ヶ月とはいえ教師の体験をするために宝徳学園へ赴いたのだ。高校教師というのは、中学生の頃からずっと抱いていた将来の目標でもあつた。昨晩は、楽しみと不安でほとんど寝付けなかつたぐらいである。

待ちに待つた教育実習の初日に、こんな事件に出くわすなんて誰が想像できただろうか。洋輔は狼狽を隠すことが出来なかつた。

「あれ……自殺だよね」

女生徒は依然薬品を眺めながら、後ろに座つている洋輔に訊いてきた。女生徒の口調には、まるで自分に言い聞かせるかのような響きがあつた。

彼女自身も分かつてゐるはずだ。あれは飛び降り自殺のなにものでもないということを。分かつてゐるが、誰かに聞いたかつた。洋輔には、そのように見えた。

女生徒の肩がかすかに震えているのに、洋輔は気づいた。そういえば、死体を見ていた彼女の目は赤かつた。泣いていたのだ。

死体を見たから彼女は泣いたのか。女の子だから、それが普通の

反応なのかもしない。実際、他の女生徒からも嗚咽が聞こえた。しかし洋輔は、はつきりと根拠があるわけではないが、女生徒が泣いたのは、死体を見た以外にも何か特別な理由があるような気がしていた。

洋輔が何か口を開こうとしたと矢先、奥の部屋から養護教諭の松平邦和姿を現した。その表情は、険しかつた。

松平はオールバックにして髪を後ろにまとめており、山田に勝るとも劣らない体格をしていた。昔、いかにもスポーツマンだったという風格を漂わせている。洋輔は、松平と接するのに若干の抵抗を抱いていた。

「はい」

片手に持っていた物を、松平は洋輔に差し出した。それは、一粒の錠剤だった。

「吐き気が止まると思うから」

「けど、いいんですか。勝手に飲んじゃって」

他人から貰った薬を服用してはいけないと、何回か保健の先生に注意されたことがあるのを、洋輔は思い出す。

「大丈夫、大丈夫。市販だから、誰が使つても同じだよ」

宝徳学園には似つかないほど、松平の性格は楽観的であった。

「しかしそれ、驚いたね。生徒が自殺なんて」

松平がベッドに腰をかけた時、軋む音が保健室中に響いた。その音に洋輔は大げさに肩をびくつかせたが、薬品を眺めたままの女生徒は無反応だった。

「佳代ちゃん、詳しい話を聞かせてくれないか?」

と、松平は女生徒のほうへ顔を向けた。佳代と呼ばれた女生徒はようやくこちらへ振り向いた。佳代は、ぎこちない笑顔を浮かべていた。

「私、他の生徒たちのように中庭で勉強していたんですね。そしたら突然、耳に不快な音が入ってきて、見たら人の死体があつて……」喋つていくうちに感情が高ぶってしまったのだろう、笑顔を崩し

彼女は両手で顔を覆つた。松平は後悔した表情を作り、再び洋輔のほうへ顔を向けた。

佳代はとつくるのとうに限界を迎えていた。さきほど薬品を眺めていたのも、気持ちを紛らわすためだつたのだろう。そして振り返つた時、彼女は笑顔を浮かべていたが、やはり無理やり取り繕つたものだつた。こちらに悟られまいと、懸命に振舞つていたのだ。

そんな彼女を、洋輔は不覚にも愛おしく思つてしまつた。その感情の正体が果たしてどのような類のものなのか、幸いにも洋輔はつかめていなかつたが、氣づくまで最早時間の問題だつた。

「しかし、どうして自殺なんか……」

「君は、自殺と断定しているようだね」

「は？」

松平は意味深な表情を浮かべた。

「自殺ですめばいいんだけどね」

「どういふことですか？」

洋輔が訊くと、松平は突然我に返つた顔をして、やがて表情を和ませ言つた。

「中年の、独り言だよ」

そんなこと言われても、洋輔には松平の言葉を独り言として聞き逃すことなんかできなかつた。

自殺じゃなければなんなんだ　　洋輔は、心の中で憤慨した。

「そういえば、君は今日来た実習生の一人だよね？」

「え、あ、はい」

唐突に話題を変えられ若干戸惑つたが、洋輔は頷いて言つた。

「ついいいないね、一日田だというのにこんな目にあつて」

不謹慎だが、洋輔は吹き出しそうになつた。佳代と同じ事を言つてからだつた。

「死体を見て、気持ち悪くなつたのか」

松平はじつと洋輔の目を見つめながら、訊いてきた。洋輔は見栄を張ることなく、黙つて頷いた。

「そうか」

頷きながら、松平はゆっくりと洋輔の手のほうへ視線を移動させ、しまったという表情を浮かべた。

「ごめんね、忘れていた。水だよね。そうだよ、水だよ。水がなきや、薬飲めないよね」

言いながら立ち上がり、松平は奥の部屋へと姿を消した。

正直言うと、洋輔はこの薬を飲むのに躊躇いがあった。市販といえども、他人から渡された薬はやはり飲む気にはなれなかつた。

「ねえ、先生」

不意に、佳代は声をかけてきた。昼休みの時に声をかけてきた彼女とは思えないほど、その姿は憔悴しきつっていた。

「私……どうしたらいいのかな？」

佳代が何を言つてゐるのか、意味が分からず洋輔が顔をしかめていると、勢いよく保健室のドアが開いた。

ドアのほうへ振り向くと、そこには息を切らした男子生徒が立つていた。

「佳代！」

男子生徒は佳代の名前を叫び、堂々とした足取りで保健室へと入ってきた。

真ん中へ来た辺りで、男子生徒はようやく洋輔の存在に気づいたらしく、嫌悪感を露にしたが、それでも佳代のほうへと近づいて行つた。

「何よ

佳代は今にも泣き出しそうな顔をしている。声も震えていた。

「ここに入ったところを見て、来たんだ」

そう言つと、男子生徒は佳代の腕を掴み無理やり連れて行こうとした。

「ちょっと、何よ！」

佳代は激しく抵抗したが、男子生徒の力には太刀打ちすることが

出来なかつた。

「俺と一緒に来るんだ！」

「離して！」

「ちょっと、君」

見かねた洋輔は、男子生徒のもとへ行き佳代から引き離した。

「何すんだよ、おっさん」

「おっさん、つて」

俺はまだ二十一だぞ、という言葉が喉まで出掛かつたが、ぐつと堪えて大人な対応を心がけた。

「彼女嫌がつているぞ」

「俺にはそう見えないね」

この自惚れている男子生徒を、思いつきり罵つてやりたいという衝動を何とか抑え、無感情で洋輔は言った。

「君は彼女のなんなんだ？」

「どういう意味だよ、それ？」

男子生徒は食つて掛けってきた。

「お前、佳代の彼氏気取りか？」

宝徳学園の生徒とは思えないほど、男子生徒の気性は荒く幼稚だ、洋輔はそう思った。相手にするだけ、時間の無駄かもしれない。

「俺はな、佳代の」

「赤の他人だよ、こいつ」

男子生徒の言葉を遮り、佳代は驚くほど冷たい声で答えた。

「な、何？」

「うつさい、本城」

変わらぬ冷たい口調で、佳代は本城と言つ男子生徒に、突き放すように言つた。

「本城つて……」

動搖を、本城は隠そつとしなかつた。察するに、冷たくされたのが驚きだつたのだろう。

洋輔は、本城と佳代の関係性がつかめなかつた。

「なあ、お前　」

「止めて！」

無理やり引き寄せようとする本城の手を、佳代は叫びながら振り払った。その時、ポケットから丸められた一枚の紙が落ちてきた。

「それ……」

本城が拾おうとすると、佳代は覆いかぶさるようにして紙を拾つた。

紙を入れていたポケットにしまい、佳代は立ち上がりて洋輔のほうへ顔を向けた。

「じゃあね、先生」

小さい声で言うと、頭を伏せながら佳代は保健室を出て行った。本城は手を伸ばして佳代を止めようとしたが間に合わず、がっくりと肩を落とした。

「くそっ！」

悪態をついて、本城は洋輔のほうへ顔を向けた。

その表情は何か言いたげであったが、結局何も言わないで保健室を出て行つた。その後姿は、どこか寂しげであった。

佳代と本城は付き合つていたのだろうか。しかし、佳代は本城に對して、理由は分からぬが怒りを抱いていた。赤の他人だと、佳代は躊躇うことなく洋輔に言つていた。

解せないことはたくさんあるが、今は関係ないだろう、そう自分に言い聞かせ、洋輔は座つていた椅子のほうへ体を向けると、視界にコップを持つている松平の姿が映つた。

「あ、先生。見ていたんですか？」

意味ありげな微笑を浮かべながら、松平は洋輔に近づいてくる。

「邪魔しちゃ悪いと思つてね」

洋輔は、その言葉の意味を理解するのに時間はかからなかつた。

「二人は付き合つてゐるんですか？」

興味なさそうに素つ気なく訊いたが、内心では知りたくて仕方がなかつた。

「いや、違つと思つよ」「ぬつ

松平の答え方も素つ氣無かつた。

「違つんですか？」

「多分ね」

思わず聞き返してしまつた洋輔に、松平は訝しげな眼差しを向けた。

「いや、ほり、なんかそんな雰囲氣があつたから

慌てる洋輔に、松平はにやけながらコップを差し出した。

「よかつたな」

「何がですか？」

松平が何を思つてよかつたと言つたのか、本当は洋輔自身も分かっていたはずだ。けど、それを認めたくない自分がいた。

「佳代ちゃん、男友達いるからなあ

聞き流そうとしたが、無理だつた。

「さつきの彼、ええと……そつだ、本城君とも仲いいし、それと誰だつたかな、凄い頭のいい子……やっぱ思い出せないわ

無理に思い出そうとして頭を悩ませている松平を尻目に、洋輔は佳代のことを思い浮かべため息をついた。所詮、自分と佳代は、教育実習生と生徒の関係なのだろうと。

「そういえば、君は佳代ちゃんと仲がいいのかい？」

「え？」

思わず声をあげてしまつたのは、心の奥に秘めているものを松平に見透かされたからだと思ったからだ。

しかしすぐそれを打ち消し、松平の質問に答える。

「まあ、仲いいかは分からないんですけど、彼女のほづから声をかけてくれて、少し話したんです」

「なるほどな」

どうやら、松平は納得の様子だつた。

「Jの学園では珍しいくらい、明るい子だ」

松平の言つとおり、彼女の明るさはJの学園に似つかわしくなか

つた。実際、洋輔は教育実習生として今日、この学園を訪れてから生徒たちが仲良くお喋りをしている風景を見ていない。皆、人と接することを嫌い勉強ばかりをしていた。正直、洋輔はうんざりしていた。せめて楽しく、教育実習をしたかったのだ。そう思っていた矢先に、彼女と会った。洋輔は少し救われた気がした。

佳代に特別な感情を抱いていることは、言つまでもないだろう。だが、洋輔はそれを決して認めはしなかつた。そんな不純な動機から、教師になつたと思われたくないからだつた。

「保健室にも、前は時折顔を見せてくれる程度だったが、最近はよく来てくれるね。私の話し相手になってくれているんだよ」頷きながら、洋輔は松平にかすかな嫉妬を感じていることに気づき、自分を叱咤した。

「けど、彼女の様子少し変じやなかつた?」「

「変ですか?」

佳代の普段をあまり知らない洋輔に言われても、答えられるわけがなかつた。まさか松平は、自分の気持ちを知つてわざとこのような質問をぶつけたのではないか、そのような疑いを洋輔は向けた。私は、普段の彼女のことを知つてゐるよ。

松平の口は、そう言つてゐるような気がした。

「なんか、いつもと違つうよくな」

やつぱりだ。洋輔は冷ややかな気持ちで松平を見つめた。

「けどさあ、普通人が死んだくらいであんな泣くかねえ」

「さあ」

洋輔は素つ氣無く返し、そつそと薬を飲んでこの保健室を出て行つとした。

一錠の錠剤を口に含み、水でそれを無理やり体の中に流し込む。松平はその動作に目をくれず、なにやら腑に落ちない点をあげつてゐようだった。

「なんであんなに泣くのかな。やつぱり死体を見ると、悲しいのか。彼女だつたら、泣くのか。けど……」

「チップをテーブルに置いて、保健室を出て行く準備を始めると、松平は声をかけてきた。

「ねえ、やっぱり佳代ちゃんに限らず、普通の女の子であればショックで泣くのかな？」

佳代に限らずといふのと、松平の口がいつそつ真剣になつたので、洋輔は少し答える気分になつた。

「そう言わると、そうですね」

洋輔は、死体を見ていた時の生徒たちを、脳裏に思い浮かべていた。

死体を囲んでいた生徒たちは狼狽を浮かべていたが、涙を流している者はほとんどいなかつた。女子は、何人か嗚咽を漏らしていたが、佳代みたいに号泣している者はいなかつた。

あれが彼女だといわれればそれまでだが、普通に考えれば、誰か分からぬ死体を見ただけで目を赤くするほど泣く者はいない。

「私の、気にしそぎかもしれないけどね」

そう言って、松平は重くなつた空氣を和ますかのように笑いながら言った。つられて、洋輔も笑つた。

けど、心中は穏やかじやなかつた。

松平のおかげで、佳代という女の子のことをもつと知りたくなつてしまつた。

その中には好意というものもあるが、それだけじゃない。松平が口にした疑問が、洋輔の中でも引っかかつていて。

「薬、ありがとうございました」

ここで長く考えていても仕方がない。洋輔はお礼を言つて、足早に保健室を出て行つた。

見送ると、松平は静かになつた保健室を見渡し、そして佳代たちが来る前までやっていた実験を再開するため、奥の部屋へと消えた。

現場にいた者たちは、警視庁からやつてきた刑事たちによつて食堂に集められていた。集められた生徒たちは、こんな状況にも関わらず勉強に励んでいる。

食堂は第三校舎の一階にあり、全校生徒が食事をできるようになり広く設計されていて、お互いが向き合う形で作られた、百人座れる長テーブルが縦に六列並べられている。集められたのは三十人で、一つの長テーブルに間隔を空けて座らされていた。

洋輔は貧乏ゆすりをしながら、腕時計に目を落とした。

時刻は、六時を回っていた。集められてからすでに一時間近く経過しているが、それきり刑事たちは食堂に姿を現さない。色々と調べることがあるのだろうと、洋輔は無理やり自分を納得させようとしたが、一向に収まることのない吐き気と若干の眠気がそれを妨げていた。

松平からもらつた薬を飲んでも吐き気は収まらず、むしろ飲む前よりも悪化しているように感じ、さらに眠気も襲つてきているのだ。市販だからといって、やはり他人からもらつた薬は飲むものではないなど、洋輔は学んだ。

洋輔は背もたれに背中をうずめると、長テーブルを見渡した。

食堂に集められてから、時間がもつたないとばかりに集められた生徒達が勉強をしている。

この状況で、よく勉強していられるよな。

軽蔑の眼差しを向け、胸中で洋輔は呟いた。

不意に佳代のことが心配になつた洋輔は、一番奥のほうへ座つている佳代のほうへ顔を向けた。両手で顔を覆い、リズムよく肩を動かしている。佳代が負つた心の傷は相当深いようだった。

と、ここで洋輔は松平に言われた一言を思い出した。

佳代の様子が変ではないかと、松平は指摘していた。確かにその言葉には、納得のいくところがあつた。

あの死体を見てから、彼女はずつと泣き続けていた。何に対して泣いているのか、洋輔にはもはや分からなかつた。

死体を見たショックから泣いているのか、それとも……。

「皆様、お待たせしました」

六時三十分 ようやく、二人の刑事が警察手帳を掲げながら食堂に姿を現した。

「警視庁捜査一課の、館林と申します」

「同じく警視庁捜査一課の、海藤と申します」

館林と名乗った男は、いかにもベテランという風格を漂わしていた。素人の洋輔にも、只者ではないと分かる。短髪で、端正な顔立ちをしている館林は、実年齢よりも若々しく見えた。

一方の海藤という男は、少々肥満気味で、スーツを身軽に着こなしている館林とは違い、ラフな格好をしていた。それが、洋輔に不快な印象を与えた。

「すいません。調べたいことがたくさんあって、時間がかかってしまいました」

「調べたいことって、あれは自殺じゃないのですか?」

一人の男子生徒が、勉強している手を止め拳手をして発言した。

「ええ。その可能性は大きいと思います」

にこやかな表情で、館林は答えた。

洋輔は再度、佳代のほうに視線を向けた。依然として佳代は、両手に顔をうずめたままだった。

おそらく館林たちは、死体についての情報を自分たちに話すだろう。佳代は、その情報を聞くのが辛いはずだ。これ以上、佳代の泣いている姿は見たくない。

そう思い立ち上がつた洋輔は、抗議するため館林のほうへ顔を向けて言った。

「これ以上、僕たちを拘束しないでください」

「はい？」

腹の底から声を出したつもりであつたが、死体を見た時からの吐き気のせいで、上手く声に出すことが出来なかつた。仕舞いには、その場に倒れてしまつた。

「大丈夫ですか！」

海藤が、その巨体を揺らして洋輔に近づいてくる。館林も、心配そうな眼差しを洋輔に向けている。

「館林さん、凄い熱です」

海藤は、洋輔の額に手を当ててから言った。

「どうしたんだ」

先ほどまで静寂に包まれていた食堂は、一気にざわつき始めた。周りの生徒たちは、口々に何か呟いている。

「どうしましたか？」

館林は洋輔のそばまで行くと、洋輔の頬にそっと手を当てて、すぐ離した。

「病院に連絡だ」

いよいよ大事になってきた。海藤はポケットから携帯を取り出し、病院へ連絡を入れた。館林は、動搖する生徒たちを落ち着かせる役目に徹していた。

「大丈夫です。きっと、助かります」

数十分経つた頃にサイレンの音が遠くから聞こえてきた。サイレンの音を聞いて、洋輔は薄れ行く意識の中、よつやく事態を把握し、胸中で呟いた。

俺、運ばれるんだ。

田を覚ますと、病院独特の香りが鼻につき思わず顔をしかめた。大人になつても、この匂いには慣れないなど、洋輔は心の中で自嘲した。

しばらく朦朧としていた意識だが、徐々にはつきりとしてきて、やがて両腕に激痛を感じるようになつた。

激痛の正体を確かめるため両腕を上げようとするが、右腕が何かに引っかかり動かすことが出来なかつた。

顔を右に向けると、包帯を巻かれた腕に点滴がさしてあつた。同じく左腕にも包帯が巻かれていて、洋輔の不安は煽られるばかりだつた。

色々とこの状況について聞きたいことが山ほどあつたが、あいにくここには個室で、周りには誰もいないため、知ることは出来なかつた。

それにしても、何故自分は病院に運ばれたのだろうか。その疑問が、真っ先に脳裏をよぎる。

普通に考えればおかしかつた。死体を見て気持ち悪くなつて倒れたとはいえ、病院に搬送され、両腕に包帯を巻かれて点滴がさされているという状況になるはずがなかつたからだ。

今思えば、体調が急激に悪化したのは保健室を出てからである。保健室にいた時、自分の身に何かあつたのだ。

病院に搬送される理由を決定付けた、何かが。

「目が覚めましたか」

思案する間もなく、病室に一人の男が入つてきた。警視庁からやつてきた、館林と海藤だつた。

「随分、苦しそうですね」

洋輔のこの状態を見て、海藤はそう発した。口調には、デリカシーの欠片も込められていなかつた。

隣の館林のほうへ目をやると、まるで洋輔の姿など目に入つていよいよで、思索にふけつてゐるように見えた。

「しかし、驚きました。いきなり倒れたんですね」

洋輔は、海藤という男にあまりいい印象は持つていなかつた。口調といい、その格好といい、腹立しさが湧いてくる。が、当然そのようなことは口に出せず、代わりに目で訴えていた。

海藤はそれに気づく様子もなく、べらべらと喋り始めた。

「瀬郷洋輔さんでしたつけ。聞きましたよ、職員の先生から。あな

たはあの城東大学に通つてゐるんですつてね。なかなか優秀じやないですか。まあ、優秀じやなければ宝徳学園の教育実習生なんて務まらないですもんね。本当、すごいです。けど、ついていませんよね。初日からこんな事件が起きたや。大学に戻ることになつちゃうんですかね」

我慢できなくて、助けてもらつつもりで館林へ視線を向けた。
しかし館林は全く気づかず、依然として考えを巡らせていくようだつた。

館林にとつて何か引っかかることがあるのだろうか、そう思い始めた洋輔の耳には、最早海藤の言葉など耳に入つてこなかつた。「僕も教師になりたいと思つた時期はあつたんですけど、高校二年生のときに転機が訪れましてね。警察官に助けてもらつたことがあらんですよ。落し物を届けてくれたんです。警察官って意外といい仕事なのかもな、つて思い始めて、そしたら決断するまで早かつたですね。大学への進学も当時は考えていたんですけど、僕は警察官にならうと思つて」

「ちょっといいですか？」

館林は強引に話を遮り、洋輔のほうへ顔を向けた。海藤は話を邪魔されたことへの不快感を隠そつとはしなかつた。

「すみません、お疲れのところ。状況を軽く説明してから、一つ質問をさせてください」

海藤の話を永遠されるよりかは、館林の質問を受けていたほうがはるかにましだつた。

「医師の方に無理を言つて面会をさせてもらつてゐる状況なんで、手短にすませますね」

館林の言い方には、暗に海藤への非難が込められていた。

「この三日間で分かつたことが一杯あるんですよ」

「三日間？」

洋輔は思わず聞き返した。

「三日間も僕は眠つていたんですか？」

「まあ、そつ……なるんですかね」

歯切れの悪い返答に、洋輔は首を傾げた。

「非常に危険な状態だったと、担当の医師から聞かされました」

脱力してしまった洋輔を尻目に、館林は続けた。

「あなたは第三校舎にいたそうですね」

力なく、洋輔は頷いた。

「中庭に向かつた際、誰かと会いませんでしたか？」

「誰か？」

館林の質問の意図が分からず、洋輔は首を傾げて呟いた。

「とくに誰も見ませんでしたけど……」

と、ここで洋輔はようやく館林の考えに気が付いた。あの思案顔も、

これで合点がいく。

「もしかして館林さんは、これを自殺じやないと考えているのですか？」

洋輔の鋭さに館林は少なからず動搖を見せたものの、刑事というだけあつてすぐに立て直した。

「詳しいことはお話できません」

本心から発せられた言葉だった。これ以上は、いくら粘つてもきっと話してくれないだろうと、洋輔は潔く諦めた。

「目が覚めたとはいえ、まだ絶対安静なんですから。また後日、お伺いします。その際、他の方々に提示した情報はお話しします。それと、あなたの身に何が起こったのかも」

そんなことを言われても、落ち着いて眠れそうになかった。この三日間、何があったのか。何故警察は他殺の可能性も視野に入れているのか。

きつと、自分以外の現場にいたものはある程度の情報は聞かされているのだろう。高熱で倒れさえしなければ、こんなもどかしい気分など抱かなくてもすんだのにと、洋輔は後悔していた。

「それでは、また。お大事に」

言つと、館林は足早に病室を去つていった。海藤は、さきほど話

を遮られたのをまだ根に持つていいのか、不機嫌さを露にして館林の後に続いた。

洋輔は枕に頭を押し付けて、ゆっくりと瞼を閉じ、これからこの頭に思い浮かべた。

当然だが、教育実習は中止になるだろう。生徒の自殺騒動が起り、その上高熱で倒れてしまい、教育実習どころではなくなってしまった。数カ月後には、平凡な大学生活を再開しているに違いない。そう思うと、気が滅入ってくる。

一度でいいから、生徒たちに授業してみたかったな。

洋輔は、胸中で呟いた。

悔しかった。何も出来ないのが非常に悔しくて、情けなかつた。けど、どうすればいい。宝徳学園はおそらく休校になり、洋輔は大学へ戻ることを余儀なくされる。

自嘲気味に、洋輔は笑つた。

どうしようもないじゃないか。

保健室で何があったのか考えるのを忘れ、洋輔は悔しさのあまり声を押し殺して涙を流した。

数日後、洋輔は順調に回復していき、包帯もとれて自力で歩けるようになってしまった。

「よかったです、瀬郷さん。あともう少しすれば、退院できますよ」

早朝、洋輔の病室にやつてきた担当医師の長谷川は、快活な笑顔を浮かべて言った。

「もう少し時間かかると思っていたんですけどね」

長谷川の口調は、本心から喜んでいるように感じられた。それが、洋輔にとつては嬉しいことだった。

長谷川は医師になつて日は浅いが、それ故に患者のことを一途に思える、汚れない純粋な心を持つていた。年もそれほど離れていないため、洋輔は長谷川という医師に対して親近感を抱いていた。

「本当にありがとうございます」

洋輔も、本心からお礼を言った。

「いえいえ。けど油断しないでくださいね。まだ退院ではないんですから」

長谷川の釘を刺すような言い方も、洋輔は許せていた。

「じゃあ、長谷川先生。そろそろ教えてくれますよね」

洋輔がそう切り出すと、途端に長谷川の表情は曇り始めた。

「そう……ですか」

狼狽を露にして、長谷川は狭い病室を見回している。

「駄目ですか？」

今日こそ引き出してもやると、洋輔は心に固く誓っていた。

退院が間近に迫っているのだ。訊くチャンスは、もう残りわずかだ。教えてくれないというのなら、いくら相手が長谷川でも暴れてやる覚悟でいた。

「分かりました。隠していても仕方ないことですし」

ようやく長谷川は、洋輔に話す覚悟を決めた。ずっと粘った甲斐があったと、洋輔は胸中で呟いた。

数日前、刑事たちがここを訪れてから洋輔にはずっと引つかかっていたことがあった。

自分の両腕に巻かれている包帯は、一体何なのか。

食堂で、気分が悪くなり倒れたというところまでは覚えていたが、それ以後の記憶は全くないのだ。倒れただけで腕に包帯が巻かれたとも考へられない。ということはつまり、寝ている間に何かあった、もしくは無意識のうちに何かしていたということになるのだ。

それが分かれば、大分原因を絞りめるはずだ。

それらのことについて、洋輔は毎朝、長谷川が病室にくるなり訊いていた。しかし長谷川は答えようとせず、ずっとばぐらかしてきたのだ。

今になって、長谷川はその質問に答えてくれようとしている。退院が間近に迫っているので、喋ってくれる気にもなっててくれたのだろう。

「僕からはあまり言いたくなかったんで、ずっと隠してきたんですが。まあ今日、刑事さんもお見えになるそんなんで、どうせ知ることになるでしょうから僕からご説明します」

刑事がやつてくるというのは、初耳だった。そのことも、洋輔を動搖させないための親切心から隠していたのだ。

「まず一つ、お聞きしたいことがあるんですが、いいですか?」「はい」

洋輔は、並々ならぬ緊張感を感じ取つて、思わず生唾を飲み込んだ。長谷川の表情には、いつも浮かべている笑顔はなかつた。

「单刀直入に窺います。倒れた当日、何か変なものでも口にしましたか?」「変な物?」

瞬時に、養護教諭の松平からもらつたあの薬を思い浮かべた。

「変な物っていうか……強いて言うなら、薬ですかね」

「薬？」

「ええ。僕、自殺死体を見たときに気分が悪くなっちゃって、保健室へ行つたんです。そしたら、養護教諭の松平先生が薬をくれて「どのような薬ですか？」

「吐き気を抑えるための薬、つて言つていました」

洋輔は、他人から受け取つた薬を飲むかどうか最後まで悩んだが、松平の厚意を無下にすることもできず、結局飲んでしまった。

予感はあつたが、やはりあの薬がいけなかつたというのか。

「他人から、薬を受け取つて飲んだと言つのですか？」

長谷川は咎める口調で言つた。

「いや、僕も最後まで悩んだんですけど……」

言い訳をしようとしたが、途中で言葉に詰まつてしまつた。

つまり、にうなつたのも全て悪いのは自分なのだ。言い訳を並べても仕方ない。

「そうですか」

長谷川の目は険しかつたが、洋輔をこれ以上責めるつもりはないようだ。長谷川の関心は、すでに別のほうへあつた。

「あの、どうかしました？」

重苦しい沈黙に耐え切れなくなつた洋輔は、長谷川の目を覗いて言つた。

「……けど、ありえない……」

深刻な顔をして、長谷川は一人で思案していた。時折聞こえてくる長谷川の呟きの意味を、洋輔は知りたくて仕方なかつた。

「……薬は、関係ないのか……」

数分、長谷川は頭の中で推理を展開していたが、自分なりに納得したのか、二三度頷いてから別の話題を洋輔にふつてきた。

「巻かれていた包帯について、お話ししますよ」

長谷川は、以前包帯が巻かれていた洋輔の両腕に手を落とし、言った。

「どうして包帯が巻かれているのか、理由を説明されなかつたから、

気になつたことでしょう」

「誰も説明してくれないんですねもん」

ふてくされたように、洋輔は言った。

「ええ。言わないほうがいいという、我々の配慮です」

「どうりで誰も教えてくれなかつたわけだと、洋輔は一人納得した。
「それじゃあ、この包帯は？」

ついに疑問が解消される喜びと、実はそれを知るのが怖いという不安が入り混じり、洋輔は複雑な心境で恐る恐る聞いた。

「暴れただんですよ、瀬郷さん」

「暴れた？」

言葉の意味が解せなくて、思わず洋輔は訊きかえした。

「暴れたって、どういうことですか？」

「瀬郷さんは意識不明の重態で、こちらに搬送されてきました。我々が診察している最中に目を覚まされて、急に暴れだしたんです」長谷川は真剣な表情で話しているが、洋輔にはどうしても信じることが出来なかつた。

「僕には暴れた時の記憶は一つもありません。無意識で暴れていた、つて言つことなんですか？」

「そう考えるのが、自然でしょう」

洋輔は、まだ半信半疑な気持ちだった。

「瀬郷さんの両腕に巻かれている包帯も、暴れた際に怪我をしたためです」

言われて、洋輔は両腕に目を向けた。

確かに辻褄は合つが、それでも納得のいかない部分が洋輔にはあつた。

「けど、今までにそんな症例あるんですか？」

「私が受け持つた患者さんの中に、そのような人は一人もいませんでしたが、前例としては、薬物中毒者の方が突然暴れだすという…」

最後のほうは言葉を濁して、長谷川は言った。

…

「俺、薬物中毒者と一緒にですか?」

怒りを押し殺しながら、洋輔は言った。

「いえ、そんなことはありません」

慌てて、長谷川は否定した。

「診察した結果、瀬郷さんに薬物反応は出ませんでした。私は、あくまで前例をあげただけですので、瀬郷さんを薬物中毒者だなんて思つておりません」

必死に弁解する姿が、洋輔には滑稽に見えた。

「いいですよ、もう」

冷めた気持ちで言つと、洋輔は気持ちを紛らわすため、窓に映る景色に目をやつた。中庭を一望できるこの個室を充てられたことには少なからず感謝していた。

「あれ?」

中庭をこの病棟に向かって歩いてくるスーツ姿の男が見えて、洋輔は思わず声を上げた。

「どうしました?」

長谷川は立ち上がり、窓の近くまで行き外へ目をやつた。

「あ、刑事さんですね」

その口調には、どこか安堵した響きが込められていた。

「それじゃあ、私は刑事さんを迎えて行きますので。しばらくお待ちください」

「は」

洋輔は刑事が見えなくなつた中庭に目を向けながら、返事をした。後ろで、ドアが閉まる音が聞こえてきた。

「お待たせしました」

しばらくすると、長谷川の声とともにドアが開かれる音が聞こえてきた。振り返ると、長谷川の後ろに館林の姿が見受けられた。

「お久しぶりですね、瀬郷さん」

愛想よく館林は挨拶したが、その目は笑つていなかつた。

「僕の代わりに説明してくださいね」

長谷川は館林に小声で言つた。館林は頷きながら、横目で洋輔の姿を捉えていた。

「分かりました」

一言そう言つと、館林は長谷川に退室を促した。それに従い、長谷川は足早に病室を後にしてた。

館林は人の笑顔を浮かべて、さきほどまで長谷川が座っていた椅子に腰を下ろした。

数分間、お互ひ無言のまま見詰め合つていたが、やがて館林が沈黙を破つた。

「長谷川先生は、あなたに巻かれていた包帯のことを話しましたか？」

椅子に腰を下ろしながら、館林はゆっくりとした口調で言つた。

「包帯は、僕が無意識のうちに暴れて、怪我したから巻かれたんですね？」

確認を取る口調で、洋輔は言つた。

「ええ。その通りです」

「僕が暴れた原因というのは？」

「それはまだ、はつきりと分かつていません」

館林の口調からして、何か隠しているとは思えなかつた。

「分かりました」

半ば失望するような気持ちで、洋輔は言つた。

「けど、私が今日訪れたのは、そのような話をするためではありますせん」

刑事の言葉に興味を惹かれ、洋輔は館林のほうを見た。

「事件の説明です」

途端に、洋輔の動機が激しくなつた。

「あなたも知つておかなければならぬ。学園の生徒が飛び降りた事件のことを」

そのことはずっと知りたかった。しかし、この病室にはテレビがなく、出歩いてテレビのある待合室に赴いても事件のことはすでに

報道されていないのだ。新聞も読まないため、事件の知識は皆無だつた。

まさか、刑事から直接話を聞けるとは。洋輔にとつて願つてもな

いことだつた。

「最初から、説明しますね」

洋輔は、館林の言葉に身を乗り出して頷いた。

「自殺したのは、宝徳学園の三年生、姫島良助、十八歳です」
館林はスーツの内ポケットから手帳を取り出し、付箋の張つてあるページを開いて読み上げた。

「両親は小学校六年生の頃に他界し、今は親戚に引き取られているそうです」

姫島の紹介を終え、ここから話はいよいよ事件に入った。

「食堂に集めた人たちの事情聴取から、姫島君が飛び降りたのは大体午後四時二十分頃だと決定されました」

「確かにその頃です。肉の潰れる音を聞いたの」

すかさず、洋輔は言った。

「なるほど。その頃、あなたは第三校舎にいた。何故ですか？」

館林は探るような目つきで洋輔を見つめ、質問した。こんな質問されるとは思っておらず、洋輔は動搖した。

生徒の学力が想像以上に高かつたから図書室で勉強をしていましたと、正直に答えることに躊躇いがあつた。洋輔にだつて、羞恥心ぐらいはある。

しかし、答えなければ館林の追求は激しさを増すだろう。これを自殺とは考えていなきことを、館林は仄めかしていた。つまり、屋上のある第三校舎にいた洋輔を、疑っているのだ。

早く容疑者候補から抜け出すため、洋輔は正直に答えた。

「授業を見学していて、自分の学力の低さを自覚したんです。それで、図書室で勉強をしていました

顔が熱くなるのを、洋輔は感じた。

「そうですか」

そう言つて頷くと、洋輔のしかめ面を見て館林は続けた。

「あ、大丈夫ですよ。別に瀬郷さんを疑つていいわけではありません

ん。質問をしたのは、建前ですよ。それに、瀬郷さんが図書室にいたという事実も確認がとれていますんで

何か言われる前に、疑つていなといふことを館林は洋輔に分

からせた。

「ですので、安心してください」

洋輔はただ、正直に答えたのが恥ずかしく顔をしかめただけで、館林が自分を疑つているかどうかは、仕方がないことだと、割り切つていた。

「でも、刑事さんはこれを自殺ではないと考えていらっしゃるんですね」

洋輔がそう口にした途端に、館林は穏やかな表情を崩し、口を固く結んだ。その表情からは、自分が言い過ぎたことを反省しているよつにも見えた。

「そう思える根拠を教えてください」

きつい口調で、洋輔は言つた。納得のいく答えが相手から吐き出されるまで、引き下がらない覚悟だった。

「そうですか」

ゆつくりと息を吐き出しながら館林は言つて、後ろの出入り口のほうをちらちらと気にしだした。誰か来るのを警戒しているのだろう。

「あなたのおっしゃる通り、私は自殺ではないと考えています。自殺と見せかけた、他殺だと」

洋輔の目をしっかりと見つめ、館林は小声で答えた。

「分かりました。お話します」

いよいよ教えてくれるのかと期待を抱いたが、館林の鋭い目つきが突き刺さり、洋輔は一瞬落ち着いた。

「ただし、条件があります」

「条件?」

「ええ。ただでは教えられません」

刑事が大学生に何を求めるのだろうかと、少々不信感を抱いて洋

輔は耳を傾けた。

「これ以上のこと」を教える代わりに、あなたには私の捜査に協力していただきます

洋輔は耳を疑つた。

「この事件は、捜査は事実上打ち切られています。何故なら、自殺だと断定されたからです」

状況的に見て、それが妥当な考へであることは素人にも分かる。この男以外、皆自殺だと考へ、疑つていなければずだ。

なら何故、この男は他殺にこだわるのだろうか。洋輔は、疑問に思つた。

「自殺だと断定された理由は、遺書があつたからなんです」「遺書？」

「ええ。彼の学ランの、内ポケットの中に」

それは、自殺を決定付ける十分な証拠だった。

「遺書が残されていたんじゃ、自殺じやないですか？」

もつともな意見を言つたつもりだったが、それに対しての反論を館林は用意してきたみたいだった。

「遺書は全てワープロ書きでした。つまり、誰でも用意できるということです」

ワープロであれば、本人が書いたかどうか確かめることができず、誰でも簡単に用意することが出来る。館林が自殺だと考へていない理由の一つは、それだった。わざわざ遺書をワープロで書くのはおかしい。

洋輔の思考回路に、『他殺』という一文字が加えられた。

「それともう一つ、あるんです」

洋輔は、言葉を待つた。

「仮に、遺書は本人が作成したものとしましょう。けど、文面が納得いかないんです」

「文面、ですか」

「はい」

館林の自信満々な口調に、洋輔は期待を抱かずにはいられなかつた。

「彼は、宝徳学園一の秀才なんです。十年ぶりに、宝徳学園が特待生として彼を迎えたわけですから。テストでは、常に学年トップ。全国模試の順位も、上位をキープしています。もちろん成績もトップですから、進路は選び放題です」

自殺した姫島がいかに優秀だったかということを言い終え、館林は手帳に目を落とし、遺書の文面を読み上げた。

「もう限界です。受験のプレッシャーに押しつぶされました。僕は、自分の身を投げます」と、遺書に書かれていました

ここまで聞くと、館林が主張する他殺説にも共感できた。

確かに妙な話だ。成績が常にトップであれば、指定校推薦などで大学は選び放題のはずだ。一般入試を受けるにしても、姫島の学力をもつてすればどの大学も問題はないはず。姫島に、自殺する動機はないということになる。

だが、そう決め付けるのはまだ早い。これらはあくまで、館林や洋輔の推測だ。姫島は、本当に受験のプレッシャーを感じていたのかもしれない。そうなつてくると、他殺説は通用しなくなつてくる。「もちろん、これだけで断定は出来ませんが、十分可能性はあるのではないかと、私は考えております」

館林の自身溢れる口調に心を動かされ、いつしか洋輔は尊敬の眼差しを向けていた。

「一応、姫島君のクラスメイトに彼の人物像を聞いたところ、とくに情報を得られませんでした。やはり、宝徳学園の生徒はお互い干渉しあわないみたいですね」

彼らは、勉強しか興味がないのだ。学年トップが消えたことで、喜んでいる者もいるかもしない。洋輔は宝徳学園の生徒を、心の底から軽蔑していた。

あいつらは異常だよ。

現場付近にいた者たちが食堂に集められ待機していた時、誰も、

何事もなかつたかのよつにペンを走らせてゐる光景は、異様だつた。目を背けたくなつた。

そんな中、佳代は、一人端のほうで自殺した生徒のことを思い、泣いていた。それを思い出すと、怒りを通り越して悔しさがこみ上げてくる。

「あなたの気持ち、お察しします」

慰める口調で館林は言つと、元氣付けるよつに洋輔の背中を一三一度、軽く叩いた。その優しさが、洋輔の感情を高ぶらせた。

「ひとつ言つと保護者の方から怒られると思いますが、勉強ばかりする彼らは異常です。受験戦争に生き残るために、姫島君を殺害した可能性も否めない」

言い終えた館林に、洋輔は顔を向けた。

その時一瞬だけ、館林は偽善的な微笑を浮かべたが、洋輔は気づかなかつた。館林は味方であるという認識が、それを見過ごした。「最後に一つ。他殺の可能性があるとすれば、これが重要な鍵となつてきます」

一層、館林の口調に力が込められた。

「死体解剖の結果、姫島君の体内から微量の薬物が発見されました」「姫島君は、薬物中毒者だったということですか?」

「いえ、そういうわけではないと思います」

即座に否定すると、再び手帳に目を落としてメモを読み上げた。「彼の体内から発見されたのは、微量の薬です。覚せい剤の類でないということは、検査で証明されています」

「じゃあ一体、何の薬なんですか?」

「それが分かれば、苦労しないんですけどね」

ため息交じりに発したその言葉は、洋輔を失望させた。その薬が、この事件の鍵を握っているというのは、過言でもないようだつた。

「念のため、彼の身を引き取つた親戚に話を聞いたところ、通院はしていないそうです」

「医者から処方された薬ではないということですか?」

「そういうことになりますね」

洋輔の中で、ますます他殺の線が濃厚となってきたが、ふと疑問がよぎった。

怪しい材料は十分存在するのに、何故館林以外の刑事はこれを自殺だと断定したのだろうか。

「他の刑事たちは、神経を麻痺させる何らかの薬だと解釈したみたいです」

館林は、洋輔の疑問を見透かした上で答えた。

「自殺する前は、誰でも怖いんです。その怖さを紛らわすために、神経を麻痺させる薬を飲んだと決め付け、他の刑事たちは片付けてしまいました」

「けどそれって、なんだかこじつけみたいな感じがします」
納得がいかない。怪しいものがあれば、それを徹底的に追求するのが警察だらうという考え方が、洋輔の中にはあった。

「警察という組織は、そういうものです。よほどどの証拠がない限り、動こうとはしません。せめて、薬さえ分かれば事態は大きく変わるんですけどね」

「どうしても、薬の種類は分からいんですか？」

半ば警察を責めるような気持ちで訊いたが、館林はただ黙つてうなだれるだけだった。その反応を見て、洋輔は深いため息をつき、窓の外へ目をやつた。

沈黙がしばし病室を支配したが、やがて館林は口を開いた。

「言い訳のように聞こえるかもしませんが、体内から発見された薬が微量だつたせいもあるのです」

洋輔はまだ、窓のほうへ目を向けている。それでも、館林は続けた。

「それと、その薬が見たことのあるものであつたら、たとえ微量でも正体をつかめたはずなのです」

ようやく興味を示し、洋輔は振り向いた。

「どうしたことですか？」

「言葉の通り、見たことのない薬なのです。もう少し量が多ければ、どのような効力をもつ薬か、ある程度の調べはついたのでしょうか」見たこともない薬というのは、一体どういふことなのか。重要視せねばならない問題だった。

「死体解剖した解剖医の話によると、患者に与えるような薬ではないことがあります」

すでに頭は混乱を極めていた。何故そのような薬が姫島の体内から検出されたのか。自ら服用したとは考えられない。犯人はその薬を飲ませ、姫島が十分弱ったところで屋上から投げたのか。

「それ以外にも、興味深い話があるんです」

身を乗り出して、館林は言ってきた。

「姫島君の右腕に、痣を見つけたそうです」

「痣?」

洋輔は聞き返した。

「ええ。他の部分はほとんど壊滅状態だつたんですが、右腕はまだましな状態で残っていたそうで。その右腕に、痣が浮き出ていたみたいんです」

「けど、転んで打つとかじゃないんですねか?」

「調べた限りでは、出来てまだ時間が経過していない痣なんだそうです」

力強く言う館林に圧倒されながらも、洋輔は反論した。

「その痣は、きっと関係ないんですよ」

「そうかもしれないし、事件の謎を解く重要なヒントになる可能性もある」

適当に頷き、洋輔は流した。どう考へても、痣が関係あるとは思えないのだ。逆に、痣をキーワードに加えて事件の推理を展開すると、そろばかりにとらわれて、答えに辿り着けない気が洋輔はしていた。

「姫島君の体内から見つかった薬が睡眠薬の類だとして、犯人は暴行を加え、それを無理やり飲ませて屋上から落としたというのであ

れば、一応は納得できます」「

館林の推理を、洋輔は冷めた気持ちで聞いていた。

とにかく今、重要視せねばならないのは姫島の体内から発見された微量の薬の正体だつた。いくら薬についての仮説を提示しても、薬の正体が分からなければ仮説のまま終わつてしまつ。何とか薬の正体を突き止めることが、課題のようだつた。

「とりあえず、今までの話を整理すると……」

一通り情報を得たところで、洋輔は一旦これまでの話をまとめることにした。

「死んだのは、宝徳学園の三年生、姫島良助。日時は十月二十日の午後四時二十分ごろ。屋上から飛び降りたと。屋上には遺書が残されていた」

遺書の内容を忘れてしまつた洋輔は、隣で耳を傾けている館林に一瞥をくれた。察して、館林は手帳に目を落とし、内容を読み上げた。

「もう限界です。受験のプレッシャーに潰されました。僕は自分の身を投げます。そう書いてありましたが、ワープロ作成なので偽造可能です」

「はい。ここで、他殺の可能性も視野に入ります」

言い終えると、洋輔は間を置いてから続きを話し始めた。

「けど、彼は学園一の秀才です。宝徳学園は指定校だつてたくさんありますし、大学は選び放題なのです。一般入試を受けるにしても、敵なしでしょう。彼が受験という動機で自殺するとは、考えにくい。さらに、他殺説を匂わせるのが、姫島君の体内から見つかつた薬です。けど、その薬の正体は分かつておらず、いくつかの想像は出来ますが、言い始めたらきりがありません」

言い切つて、館林の反応を窺つた。

「大丈夫です。間違つていませんよ」

険しい表情を浮かべ、館林は言った。

「けど、ここからが問題ですね」

洋輔は腕を組んで、言った。

この事件の概要を言葉にしていくうちに、これからやれりとしていることがいかに困難か、洋輔は改めて痛感させられた。入り口すら、見えていない状態なのだ。

他殺だとしたら、彼を殺したのは学校関係者でほぼ間違いない。宝徳学園のセキュリティは厳しいため、一般人が校内に入つて、姫島を殺すことは不可能に近いと断言していいだろう。学校関係者の中で、姫島を殺す動機を持つものは、何人かいや、大勢いるはずだ。

洋輔がそう考える理由は、生徒たちの、異常なまでの勉強に対する執着心を見せ付けられたからであった。

校内で生徒が自殺したというのに、時間が経つたら何事もなかつたかのように勉強を再開したやつらだ。勉強に命をかけているつても過言ではない。

いい大学に進むため、またはテストの順位を上げるために、学年トップである姫島を殺害しようと考える者は、いるのではないだろうか。

発想が飛躍しすぎているかもしだれないが、しかしあながち的外れではない気がしていた。ここまでくると端から見ればただの偏見だったが、洋輔は自分の考えに自信を持っていた。

そしてこの考えは、おそらく館林も共感してくれるだろうという確信も抱いていた。

「私は、これが本当に他殺だとしたら犯人を許せません」

唐突に、館林は胸中の思いを口にした。

「この三日間、私は色々と調べてきました。宝徳学園について、姫島君について、周りの生徒たちについて。得られたものはたくさんありました。そして、私なりの推理も出来上がりつつあります」

その言葉に、洋輔の期待はいつそう膨れ上がる。

「この推理が正しければ、解決の糸口が見えてきます」

館林は笑みを浮かべ、つられて洋輔も明るい気分になつた。

刹那、脳裏にある違和感がよぎり、洋輔を困惑させた。

なんだろう、このもやもやした気持ちは。

表情は笑顔を浮かべまま、洋輔は今までのことを振り返り、必死に思考を巡らせた。

洋輔の脳裏によぎつた違和感は、姫島の自殺に対しての、館林の必死さであった。

館林曰く、他の刑事たちはこの事件を自殺と断定しているらしいが、館林は他殺だと言い張り、大学生の洋輔に捜査協力を求めている。何故そこまで必死になれるのだろうか。

姫島良助の死は、不明な点がいくつもあるにしろ状況的にはほぼ自殺だと考えられる。彼の学ランの内ポケットには遺書が入っていた。ワープロで書かれていたが、深く考えることもない。館林の同僚たちも、これは自殺だと考えて、疑っていない。

それでも館林は他殺だと考え、一人で捜査をしようとしている。今日、洋輔に会うため、一人でこの病院を訪れたのが、固い決意の現れであった。

これら三つの違和感は、余計に洋輔を混乱に陥れた。思考能力は著しく低下していき、どちらの説が正しいのかもはや判断がつかないほどになつていった。

そして次第に、洋輔は信頼していた人物へ疑惑の目を向けていた。「どうしました？」

それを察した館林は、怪訝な表情を浮かべそう口にした。

「いや、べつに」

慌てて平静を装い、その場は何とかごまかしたが、このままではいけないという危惧が、洋輔の中にはあった。

何か館林は重要なことを隠している 根拠はないが、洋輔はそ
う考えていた。

その考えが脳裏にあるから、洋輔は館林のことを百パーセント信
用することができなかつた。洋輔の思い違いで、隠し事などしてい
ないかもしれない。が、洋輔の直感はかなりの確率で当たるのだ。

だから今回も、自分を信じてみる。

館林はきっと、隠し事をしていると。

「私は、姫島君を殺した犯人を絶対に許さない」

少なくとも、その口調には偽りはなかつた。それが、洋輔をさらに困惑させた。

「姫島君の輝かしい将来を奪つた犯人が、憎いです」

どうしてそこまで感情移入ができるのか、洋輔は解せなかつた。

姫島と館林には、なんらかの接点があるというのか。

もしかしたらそれが、館林の隠し事なのかもしれない。

姫島の小さい頃から親交があつたとしたら、真剣になれるのも頷ける。館林がそのことを隠している理由は、刑事としての自覚からであろう。私情に流されて捜査するということは、刑事として失格だ。故に隠している。同僚たちにも黙っている。洋輔は、そう解釈した。

「この事件を解決するために、私は恥を忍んでこの病室を訪れました。姫路君を殺した犯人を、どうしても捕まえたいのです」

プライドを捨て、たかが大学生に必死に訴える姿は、洋輔の心を動かした。そして、自分を協力者に選んでくれた館林に感謝さえしていた。さきほど抱いていた、館林に対しての疑惑は、徐々に頭の片隅へと追いやられていった。

「分かりました。一緒に、捜査をしましょう」

館林の手を取り、洋輔は言った。

「本當ですか？」

期待通りの答えを得られて、館林は満面の笑みを浮かべた。

最初こそあまり乗り気ではなかつたが、話していくうちに、館林のことがもつと知りたくなり、この事件に隠された真実も見てみたくなつた。

姫島が自殺ではなく他殺だとしたら、犯人は誰なのか。その動機は、一体何なのか。他にも、洋輔の興味を駆り立てる謎が山ほどあつた。館林とともに、全ての謎を明らかにしたいという強い気持ち

が、洋輔にはあつた。

「大丈夫です。きっと、上手くいきます」

自分に言い聞かせるように、館林は言った。心のどこかで、館林も不安を抱えているのだろう。

「少し聞きたいことがあるんです」

これから館林と事件の捜査を行う上で、重要なことを洋輔は忘れていた。

「僕、教育実習生として宝徳学園に来たのですけれど、一体どうなるんでしょうか？」

自殺騒動が起き、学校はおそらく休校だろう。洋輔も、大学へ呼び戻されるに違いない。そうなった場合、捜査を行うのに支障をきたす。館林がどのように考えているのか、洋輔は知りたかった。

「そのことでしたら、大丈夫です」

考えはあるようだつた。

「私がこれからあなたの大学と掛け合います。大学側も、了承してくれるでしょう」

「仮に了承してくれても、宝徳学園はどうなるんですか？ 休校でしょう」

「ええ

即答なのに若干戸惑いつつ、洋輔は訊いた。

「だったら、捜査も何もないじゃないですか。どうやって、進めるんです？」

その質問の答えも予め用意していたらしく、返答に窮することなく館林は答えた。

「休校はあと四日で解かれます。それから、生徒などに話を聞くなどをして、捜査を始めましょ」

館林の力強い口調により、洋輔は頷かざるを得なかつた。

「一人の生徒が自殺したというのに、たつた一週間だけ休校というのも、おかしな話ですよね」

急に声のトーンを落とし、深刻な顔つきで言った館林の姿は、ど

「か悲しげな様子だつた。

姫島と小さな頃から親交があつたという洋輔の解釈が正しければ、そのような姿も当てはまるのだろうが、想像と若干のずれが生じていることに、引っ掛かりを覚えた。

だが、そのずれを洋輔は上手く言葉にすることができなかつた。

「これを」

不意に館林が渡してきたのは、名刺だつた。館林の肩書きと携帯番号、メールアドレスが書かれていた。

「あなたの携帯番号を、教えていただけますか？」

「あ、はい」

洋輔は記憶を頼りに、近くにあつた紙に携帯番号を書き、それを館林に渡した。

満足そうに受け取ると、館林は立ち上がり、言った。

「今日中にでも、あなたの大学へ電話をかけてみます。内容は、教育実習を続けさせてくれないだろうか、というものです。おそらく快諾していただけるでしょう」

自信に満ち溢れた言い方だつた。この物怖じしない性格が、周りの人たちに好感を抱かせる。洋輔も、その内の一人だつた。

「瀬郷さんの担当医師の話では、明日ぐらいには退院できるそうで、大学側と話した内容については明日の夜ぐらいに、報告させていただきます」

退院できるという話は初耳だつたが、気になつていたことは確かだつたので知れたのは嬉しかつた。

「分かりました。ありがとうございます」

深く頭を下げ、洋輔は感謝の意を示した。

それを見た館林も一礼をして病室を出て行つた。

病室に沈黙が訪れ、途端に寂しさが募つてきた。館林を慕つている証拠だつた。

一時は疑いも向けていたが、この短時間でよく館林を信頼できるよくなつたと、洋輔は不思議に思つていた。意外と人見知りのと

「 ころもあるのだ。」

心を開きかけている自分に、悪いを感じていたが、その反面、嬉しさもあった。館林という人物に出会えた事で、何か変わることが出来るかもしないという期待を抱いていた。これから館林とは、徐々に心から信頼できる仲になりたいという願望が、洋輔の心に渦巻いていた。

「 よし、がんばるか」

病院のベッドの上で、洋輔は気合を入れた。これから忙しくなることを覚悟し、横になつて休息をとることにした。

時刻は午後の三時半をようやく回ったところで、まだ睡魔はなかつたがそれでも寝なくてはいけないという強迫観念が洋輔を襲つた。絶対に犯人を見つけ出してみせる。心中で、固く誓っていた。もうすでに、洋輔はこの事件を他殺だと思い込み疑わなかつた。だが洋輔は、まだ知らなかつた。

自分が挑もうとしている事件に隠された、恐るべき真実を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691z/>

受験戦争

2011年12月28日21時53分発行